

第五章 文学の歴史



源氏物語(青表紙本・宮内庁蔵)

〈大学入試問題〉

⑦ 次の文章は『源氏物語』「桐壺」の巻における、桐壺帝が亡き桐壺更衣の母の邸に鞠負の命婦を慰問にさしむけるあたりの文章です。これを読んで、あとの設問に答えなさい。

(1) 野分だちて、にはかに膚寒き夕暮れの程、つねよりも、おぼし出づること多くて、鞠負の命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしき程に、いだしたてさせたまひて、やがてながめおほします。(3) かやうの折は、(4) 御遊びなどせさせ給ひしに、心ことなる、(5) 物の音をかき鳴らし、(6) はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは殊なりしけはひ・かたちの、面影につとそひて思さるゝにも、(注1) (7) 闇のうつゝには、猶劣りけり。命婦、(8) かしこにまかで着きて、(9) 門ひき入るゝより、(10) けはひあはれなり。やもめ住みなれど、(11) 人ひとりの御かしづきに、(12) とかくつくろひ立てゝ、目やすき程にて過ぐし給ひつるを、(注2) (13) 闇にくれて、臥し給へる程に、草もたかくなり、野分に、いとゞ荒れたる心地して、(14) 月かげばかりぞ、

たようですが、彰子の父藤原道長の強い希望があったようです。『源氏物語』の作者と知られ始めていたに違いありません。出仕後、彼女は中宮に『楽府』(白居易)の進講をしたりしています。『紫式部日記』や私家集『紫式部集』以後のことについては、資料が乏しくてよく分かりません。彼女のお墓と伝えられるものが、京都市北区北大路堀川下ル御所田にあります。

(注3) 八重葎にもさはらず、さし入りたる。

(注) (1) 闇のうつゝはぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり(古今集)の歌によっている。

(2) 闇にくれては人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまだひぬるかな(後撰集)の歌によっている。

(3) 八重葎にもさはらず訪ふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり(古今六帖)の歌によっている。

問一 (1)野分の、①読み仮名を記し、②説明しなさい。

問二 (2)やがてながめおほしますを口語で訳しなさい。

問三 (3)かやうの折とはどのような折か。本文を用いて答えなさい。

問四 (4)御遊びを説明しなさい。

問五 (5)物の音は、ここでは次の(イ)(ロ)の楽器のどれが適当か。

記号で答えなさい。